



WAR AND POSTWAR *The Prism of the Times*

戦争と平和

伝えたかった日本

IZU PHOTO | MUSEUM



2015年7月18日|土|—2016年1月31日|日|

開館時間: [7・8月] 10:00—18:00 [9・10月] 10:00—17:00 [11・12・1月] 10:00—16:30 *入館は閉館の30分前まで 休館日: 水曜日(祝日の場合は翌日休)、年末年始、12/24は開館
入館料: 大人800(700)円、高・大学生400(300)円、中学生以下無料 * () 内は20名様以上の団体料金 主催: IZU PHOTO MUSEUM・一般財団法人日本カメラ財団

JUNE 10, 1940 10 CENTS

戦後70年特別企画展

「戦争と平和—伝えたかった日本—」

会期：2015年7月18日|土|—2016年1月31日|日|

会場：IZU PHOTO MUSEUM

主催：IZU PHOTO MUSEUM・一般財団法人日本カメラ財団

キュレーター：小原真史（IZU PHOTO MUSEUM）・白山真理（日本カメラ博物館運営委員）

協力：高島屋史料館、東京大空襲・戦災資料センター、公益社団法人日本写真家協会、特殊東海製紙Pam、広島平和記念資料館、広島県立文書館、photographers' gallery、平和祈念展示資料館、田子はるみ、松本徳彦、山端祥吾ほか

[五十音順]

戦後70年を迎える2015年、IZU PHOTO MUSEUMでは戦中・戦後の〈報道写真〉をテーマにした展覧会を開催します。ドイツの「ルポルタージュ・フォト」を移入して始まった日本の〈報道写真〉は、モダニズムの先鋭として発展し、日本文化を海外に紹介するために用いられましたが、戦争の激化にともないプロパガンダに変容し、占領期・冷戦期の情報戦にも一定の役割を果たしてきました。本展では名取洋之助・木村伊兵衛・土門拳・山端庸介・小柳次一・菊池俊吉・林重男ら日本の〈報道写真〉の担い手たちの仕事を中心に、国内外の雑誌や写真壁画、密着帖など1930年代から50年代にかけての貴重な資料をご紹介します。〈報道写真〉の戦前から戦後への連続性や国策との関わりをテーマに戦後70年特別企画として開催いたします。

本展は〈報道写真〉の役割と時期を4つのパートに分けています。

[1] 日本文化の紹介

後発の帝国主義国として国際舞台に登場した日本は、固有の文化と近代性を併せ持つ国柄というセルフイメージを対外的にアピールしようとした。1930年代には国際文化振興会や鉄道省国際観光局などが設立され、ドイツ帰りの名取洋之助をはじめ、木村伊兵衛や土門拳らが世界に伝えたい日本の姿を写し、写真集や雑誌、写真壁画の制作を請け負いました。外客誘致の役割も担うこれらは、写真家とデザイナーによる共作の嚆矢としてモダンデザインで彩られています。



『TRAVEL IN JAPAN』3巻1号、国際観光局、1937年

[表紙構成：原弘、表紙写真：木村伊兵衛] 日本カメラ財団蔵（右は裏表紙）



『NIPPON』7号、日本工房、1936年

[表紙構成：河野鷹思、表紙写真：名取洋之助] 日本カメラ財団蔵
文化、産業、教育などを伝える欧文季刊誌『NIPPON』は、名取洋之助が1934年に創刊し土門拳らが腕を振っていました。国柄への理解促進には外客誘致の意図もあり、1940年オリンピックの東京開催に向けて制作された本号では柔道、剣道など日本スポーツの精神性を伝えました。

[2] プロパガンダ

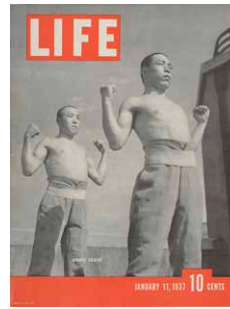
満洲事変と満洲国制定、国際連盟脱退などにより国際的に孤立していった日本は、次第に国威発揚のプロパガンダに邁進し、欧米のみならず南方向けの広報なども行うようになります。〈報道写真〉の担い手たちも戦争の激化とともに国策と歩みを共にして、強く逞しい日本イメージを広める仕事を進めます。日本側が制作したものだけでなく海外で報道された日本の様子も紹介いたします。



『写真週報』1938年6月8日17号
[表紙写真：土門拳] 個人蔵
内閣情報部が1938年に創刊した国内向け週刊グラフ誌。国内啓発と共に対外宣伝写真収集の目的を持っていました。企画会議を経て記事内容が決まり、名取洋之助、木村伊兵衛、土門拳らが撮影した写真は外国へも配信されました。創刊号には「写真報国」が謳われています。



「陸軍記念日の演奏」1943年3月10日
(提供：朝日新聞社)
「百畳敷大写真」と呼ばれた「撃ちて止まむ」は陸軍省報道部の指導のもと朝日新聞社が企画し、山端写真科学研究所が制作しました。3月10日の陸軍記念日の前後10日間、東京・有楽町の日劇と大阪・難波の高島屋の外壁に設置されました。壁画の写真は金丸重嶺の指導のもと、山端庸介が戸山の陸軍学校で撮影。



『LIFE』1937年1月11日号
[表紙写真：名取洋之助] 個人蔵



『FRONT』1-2号、東方社、1942年
[表紙構成：原弘] 日本カメラ財団蔵



海軍を撮影する木村伊兵衛、1941年、日本カメラ財団蔵
『FRONT』制作のため、1941年8月頃から、海軍兵学校、潜水学校、海軍航空隊、陸軍戦車学校、横須賀海兵団、陸軍工兵学校などが撮影されました。若手カメラマンの濱谷浩、菊池俊吉らも参加しています。



『FRONT』5-6号、東方社、1943年、日本カメラ財団蔵
ソ連の『USSR in construction』のような宣伝誌を求めている陸軍の意向を受けて、木村伊兵衛、原弘らが力を振るった不定期グラフ誌。企画会議で編集方針が決まり、絵コンテ通りの写真撮影が求められ、写真は記事形成の一要素に過ぎなくなりました。幻の「戦時東京号」の資料も展示予定。

[3] 敗戦と占領期

東方社のカメラマンたちは東京大空襲や原爆投下後の広島・長崎の撮影を行いました。敗戦を迎えると国から仕事を請け負っていたカメラマンたちは仕事を失い、焼け残った機材を手にも再出発の道を探ります。進駐軍向けのバイリンガル出版物や、占領下日本の民主性を謳い復興日本への観光誘致を図る写真を制作しました。



菊池俊吉「広島瓦斯工場のタンクの影(ハンドル)」1945年、個人蔵



山端庸介「長崎」1945年8月10日、日本写真家協会蔵



『LIVING HIROSHIMA』広島県観光協会、1949年
[表紙構成：原弘、表紙写真：菊池俊吉・林重男] 個人蔵
敗戦にともなう東方社解散後、文化社として再出発した木村伊兵衛や原弘らが広島県観光協会の要請で制作した英文の写真集。文章は東方社の元理事・中島健蔵。菊池俊吉や林重男が撮影した被爆後間もない爆心地の様子や風光明媚な観光地の写真も収録されており、「ダークツーリズム」的な要素も含んでいます。当時の印刷用版下も展示予定。



菊池俊吉「東方社の屋上から見た夜間空襲」1945年3月10日、個人蔵

[4] 冷戦期の宣伝戦

占領期を経て、東西冷戦が本格化した1956年にニューヨーク近代美術館から日本に巡回した「ザ・ファミリー・オブ・マン」展は、アメリカの対外宣伝機関USISも共催する世界巡回展でした。戦中に逞しい日本を演出した報道写真家たちはここで実行委員を務めて、唯一の被爆国としてのイメージを押し出しました。東京会場に昭和天皇が訪れた際、山端康介撮影の原爆写真がカーテンで隠され、その後撤去されたことが物議をかもしました。情報戦は戦後も続いており、〈報道写真〉はその中でも一定の役割を果たし続けたのです。

〈報道写真〉の担い手たちの言葉

名取洋之助

写真家は何時でも編輯者と読者と云ふ二重の要決を考慮せねばならないのです。
「時評と考察 ルポルタージュ写真のこと」『帝国工芸』1934年8月号



アメリカで大陸横断取材中の日本工房主・名取洋之助、1937年、日本カメラ財団蔵

木村伊兵衛

本当に日本を正しく理解させる為には、日本に於て或る程度不自然と思はれるやうなことを敢てすることに依つて、初めて先方に正しく理解させることが出来ると思ふ。
谷川徹三・木村伊兵衛対談「写真と対外宣伝」『報道写真』1941年3月号



海軍を撮影する東方社写真部主任・木村伊兵衛、1941年、日本カメラ財団蔵

伊奈信男

印刷化された写真によるイデオロギー形成の力は絶大である。
「報道写真について」『報道写真に就いて』1934年3月



評論家・伊奈信男（左）とプランナー・岡田桑三（右）、1930年代、日本カメラ財団蔵

内閣情報部

最近文学報国、音楽報国などといふ言葉があります、これらと同じ意味に於て写真報国といふことが当然考へられるべきです。
『写真週報』創刊号、1938年

林謙一

殊に大東亜共栄圏のやうに十数種の人種、言語が交錯してゐると、文字や言葉では宣伝がなかなか困難であり、映画でさへアナウンスで困却してゐる。写真宣伝がなによりも真先きに飛出してゆかなくてはならない。
「戦時に於ける報道写真の重要性」『アサヒカメラ』1942年3月号



情報局情報官・林謙一、1941年、日本カメラ財団蔵

土門拳

見せるべき相手を常に具体的に持つてゐるといふ点が、報道写真が他の一切の自慰的なお道楽写真と違ふ重要な性格の一つである。
「報道写真とフラッシュ 報道写真講演会記録より」『フォトタイムス』1939年6月号
僕達は云はばカメラを持った憂国の志士として起つのである。その報道写真家としての技能を国家へ奉仕せしめんとするのである。
土門拳「呆童漫語（三）」『フォトタイムス』1940年10月号



日本工房スタッフカメラマン・土門拳、1938年頃、日本カメラ財団蔵

亀倉雄策

そのころは、デザイナーでも写真家でも、軍の仕事をしなければ食えないし、材料も手に入らなかった。
石井彰「明石町三十一番地」『土門拳 その周囲の証言』、朝日ソノラマ、1980年



日本工房スタッフデザイナー・亀倉雄策、1938年頃、日本カメラ財団蔵

山端庸介

写真機持つたら、フットボールを撮るのも重慶を撮るのも、そんなに気分は変わらないですネ。カメラマンというものは写真機を持ったら写真のことばかりしか考えませんからネ。
『アサヒカメラ』1942年1月号



G.T.サン の山端庸介（右）、1941年、日本カメラ財団蔵

菊池俊吉

親と子を写すカメラも非情である。仕事とはいえ、申しわけない気持で写させてもらう。
「反核・写真運動」編『母と子でみる 原爆を撮った男たち』、草の根出版会、1987年



東方社スタッフカメラマン・菊池俊吉、1940年代前半、個人蔵

●関連イベント

【トークイベント】

「〈報道写真〉の亡霊」

7月26日(日): 14:30-16:30 クレマチスの丘ホールにて

北島敬三(写真家) × 白山真理(日本カメラ博物館運営委員) × 土山陽子(パリ社会科学高等研究院博士課程) × 松本徳彦(写真家) × 小原真史(当館研究員) [五十音順]

定員150名、無料、申込先着順

当日有効の観覧券が必要です。

お電話にてお申し込みください。055-989-8780

※このほかにも会期中トークイベントなどを開催予定。詳しくはホームページでお知らせいたします。

【ギャラリートーク】

毎月第3土曜日の14:15より約30分間

無料、申し込み不要。当日有効の入館券が必要です。美術館受付カウンターの前にお集まり下さい。

●関連書籍

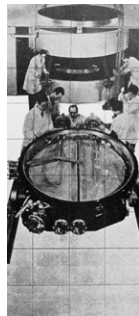
①2015年7月平凡社より展覧会関連書籍が発売予定。

②白山真理著『〈報道写真〉と戦争：1930-1960』

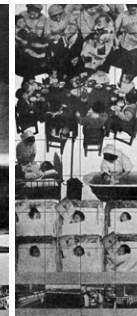
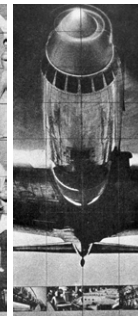
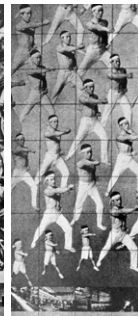
吉川弘文館、2014年



小柳次一「斥候 岩山を行く友軍に所在を示す日の丸を付けて」1938年、平和祈念展示資料館蔵



紐育万国博覧会出品写真壁画「躍進日本」1939年 [構成：山脇巖、写真：土門拳ほか、制作：G.T.サン]



| お問い合わせ |

IZU PHOTO MUSEUM

411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘347-1

TEL. 055-989-8780 FAX. 055-989-8783

展覧会担当：小原真史 (kohara@clematis-no-oka.co.jp)

| アクセス |

●車：[東京方面] 東名・裾野 I.C. → R246経由、沼津方面へ10km
[名古屋方面] 新東名・長泉沼津 I.C. または東名・沼津 I.C. → 伊豆縦貫道（無料区間）へ、長泉 I.C. 出口右折、R246経由7km

●電車：JR東海道線「三島駅」下車、北口（3番乗り場）発 無料シャトルバス「クレマチスの丘」下車（所要時間25分）

無料シャトルバス（三島駅 ↔ クレマチスの丘）時刻表

○行き [三島駅] 北口（新幹線口）発

時	9	10	11	12	13	14	15	16	17
分	平日	40	40	40	00	00	00	00	00
土日・祝日	40	40	40	40	40	40	40	40	

○帰り [クレマチスの丘] 発

時	9	10	11	12	13	14	15	16	17
分	平日	15	15	15	35	35	35	35	20*
土日・祝日	15	15	15	15	15	15	15	20	

*は御殿場線「裾野駅」経由のため所要時間は約45分です。

| 基本情報 |

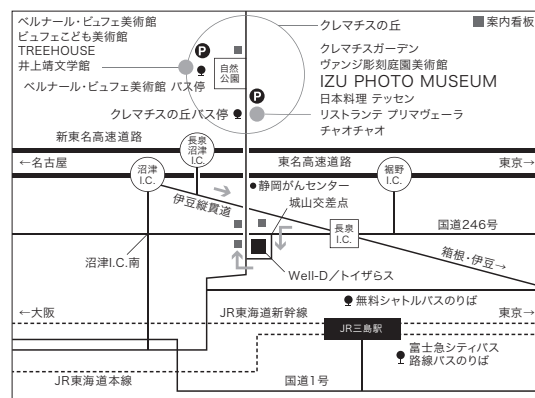
開館時間=[7・8月]10:00-18:00 [9・10月]10:00-17:00

[11・12・1月] 10:00-16:30 ※入館は閉館の30分前まで

休館日=水曜日(祝日の場合は翌日休)、年末年始、12/24は開館

入館料=一般800(700)円、高・大学生400(300)円、中学生以下無料

※()内は20名様以上の団体料金



IZU PHOTO MUSEUM

〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘347-1

Tel. 055-989-8780 Fax. 055-989-8783 www.izuphoto-museum.jp

【広報用画像】

本プレスリリース内でご紹介しました画像（デジタルデータのみ）の貸出をしております。ご希望の場合は必要事項をご記入の上 FAX または Eメールにてお申し込みください。以下の画像以外も掲載可能ですので、お問合わせ下さい。

●ご希望の画像番号にチェックをお入れください。



①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧



⑨



⑩

■ 貴媒体名

■ 掲載号

■ 発売日／放映日

年

月

日

■ 貴社名

■ ご担当者様

■ TEL

■ FAX

■ E-MAIL

@

■ ご住所

■ 資料お届け期限

年

月

日 までにご希望

IZU PHOTO MUSEUM

〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘 347-1 TEL.055-989-8780

広報担当：小原真史

FAX : 055-989-8783 E-mail : kohara@clematis-no-oka.co.jp